臨床実験報告

子宮腔部筋腫の 1 例

日本医科大学附属医院産婦人科教室 (主任 真柄正直教授)

河 野 政 男

Masao Kōno

根 本 将

Tasuku Nemoto

緒 言

婦人科領域に於て、子宮腔部筋腫の発生率は、子宮筋腫中最も頻度低く、文献によると略々 1% 以下に過ぎないと見做されている。

我々は、今年一月、その表面より 3 個の小指頭大のポリープを発生し、子宮脱出症を伴える子宮腔部筋腫を経験したので、茲に報告する。

自験例：土〇清〇 50才 6 回経産婦

初診：昭和 30 年 1 月 28 日

家族歴：特記すべきものなし。

既往歴：生来健康にして著患を知らず。

月経 初潮 16 才 最終月経 昭和 29 年 12 月 28 日
7 日間持続 経過 整 5 日間持続 量 中等度 月経時障害なし。

結婚 21 才 初産 24 才 終産 44 才分娩、産褥に異常を認めず。

現病歴：終産後間もなく、内性器下垂の感あるも、大した苦痛なき為そのまゝ放置す。昨年 8 月頃より月経周期不規則になり、月経の持続長びき、出血多量となる。又 1 カ月程前より、不正性器出血、腔内異物感、軽度の尿意頻数、下腹部牽引感、歩行障害等を来たし、1 月 22 日開業医を訪れ、子宮筋腫兼子宮脱と診断され、ついで当院外来を訪れた。

主訴 性器出血、月経過多、尿意頻数、

現症 体格、栄養共に中等度、顔面及び全身皮膚はやゝ貧血状、就中眼瞼結膜蒼白なり。体温 37 度 5 分、脈搏 80、胸部異常なく、心界やゝ左方拡大し、各辨口貧血性雑音聴取す。第 2 肺動脈音強盛なるも心電図異常なし。腹部はやゝ膨隆し、下肢浮腫なく、腱反射減退する。

内診所見：外陰部及腔の發育は尋常、表面は比較的平滑で弾力性のある鶏卵大、球形にして、移動性あ

り、且つ圧痛のない腫瘤として、腔より約 3.0 cm 脱出せる子宮腔部を認める。そしてその表面に 3 個の小指頭大のポリープを認めた。子宮体は後傾後屈、硬度やゝ硬靱、大きさ超鶏卵大で、移動性は、多少制限されておる。両側附属器には、特に異常を認めない。

診断 子宮腔部筋腫兼子宮脱

昭和 30 年 1 月 29 日 入院、入院時所見、

血液所見 血色素 20% (ザーリー)、赤血球、212 万、白血球 4200、血色素係数 0.45 血圧 124~70 mm. Hg で貧血甚しきため、輸血毎日 200 cc 10 日間 計 2000 cc 施行す。

尿所見 淡黄色、透明、蛋白、糖陰性、沈渣異常なし

手術 昭和 30 年 2 月 8 日、一般状態が好転したので、ネオペルカミン 1.4 による腰椎麻酔のもとに開腹し、子宮全剔除術を行う。

腫瘤の組織学的所見 本腫瘍は線維性筋腫にして結締性増殖が強い。尙結締織性のポリープ 3 個を認めた。

総括並に考按

1) 頻度 子宮腔部筋腫の発生頻度は稀で、子宮全筋腫に対する割合は、略々 1% 以下である。茲に諸家の報告を上げれば、Garkisch 1% Karl Kolb 0.9% Turunen 0.42% Peham 0.1%、山崎 0.61%、加賀美 0.37% 等である。

2) 好発年令 狐塚、谷内氏等によれば、28 才から 62 才迄で 40 才代が最も多く 35.5% をしめ、ついで 50 才代、30 才代の順になつて居り、一般体部筋腫と略々同様の関係にある。

3) 既往妊娠分娩との関係、腔部筋腫の妊娠に対する関係は、体部筋腫のそれとは大いに趣を異にする。即ち体部筋腫は、原発性又は二次性不妊症者に見られ

るに反し、腔部筋腫は不妊に陥ること少なく、経産婦、殊に多産婦に比較的好発し、Güessatz に依れば 40 例中、35 例は (87.5%) 経産婦にして、而もその中 10 例は、5 回以上の多産婦なりと云う。本症例も、6 回経産婦であつた。妊娠中に於ける異常としては、主として不正出血にして、既に、妊娠初期より認められることもあり、或は妊娠末期に至つて突然多量の出血を来たした報告例も見られる。その他、腫瘍の大小により異なるが、疼痛を訴える場合もある。分娩に対する関係も又、体部筋腫と異なり、一般に分娩障害を来たすことが少ないと云われている。Güessatz は 75% Natale は 44% が何等障碍なく自然分娩を遂げたと報告し、Bütter の手拳大、Heukel の 1720 gr の筋腫に於ても、尙自然分娩が可能であつたとの報告があり、之に反し、斎藤氏の鶏卵大の腔部筋腫でも、茎が短く、分娩が困難の為、穿頭術を行つた報告もある。即ち発生部位、形態、大いさに依り左右されるものと考えられる。

4) 月経 一般に体部筋腫では、比較的月経過多、月経困難症を訴えるものが多いが、腔部筋腫では、大多数が整調で、3～5 日持続し、量、中等度で、別に大した月経困難症と云うべき症状を呈しない様であるが、本症例では、月経過多、不正性器出血、中等度の腰痛を訴えていた。

5) 症状 自覚的症状は比較的少なく、多くは、帯下、不正性器出血等で、腫瘍が大きくなるに従つて、腔内異物感、排便排尿障碍、交接障碍等を生じ、腔外

に出れば、下腹部牽引痛、起坐歩行障碍等が強くなる。本症例では、不正性器出血、月経過多、尿意頻数、下腹部牽引感、歩行障碍等を訴え外来を訪れ、著しい続発性貧血を来たしていた。

6) 病理 一般筋腫と同じく本筋腫も筋線維と結締組織線維より成り、主として線維性筋腫である。

7) 診断 極めて容易である。腔内へ下垂した体部粘膜筋腫、粘膜息肉及び子宮内臓症、子宮脱出症との鑑別が必要である。

8) 治療法 レントゲン療法と手術療法とあるが、後者が原則とされている。本症例も、腹式子宮全剔除術を施行し良好な経過をとつた例である。

結 語

我々は、年令 50 才、6 回経産婦で、その表面より 3 個の小指頭大のポリープを発生し、子宮脱出症を伴える子宮腔部筋腫の 1 例を経験した。入院時、貧血甚しく、術前 2000 cc 術中 1900 cc の輸血により、無事腹式子宮全剔除術を行い、経過良好にして、術後 15 日目に無事退院せしめ得たので、ここに報告する。

稿を終るに当り、御懇切な御指導と御校閲を賜つた恩師真柄教授に深甚な謝意を表します。

文 献

- 1) 伊藤：産婦の実際 2 (12), 1521 (昭 28)
- 2) 塚本：臨床婦人科産科 5 (4), 164 (昭 26)
- 3) 吉田：東京医事新誌 2507 号
- 4) Güessatz : Monat schr. f. Geb. u. Gynäk 66 (1924)

酸素療法としての気後腹膜法

日本医科大学斎藤外科教室 (斎藤 漢教授 石川一策講師)

佐 久 間 孝

Takasi Sakuma

ま え が き

気後腹膜法は仙骨前面から後腹膜腔に気体 (O_2) を注入し後腹膜腔器官のレ線像を見ようとする方法で、1958 年 Ruiz Rivas によつて新しく発表された。本法は簡単で且つ安全である事、無痛である事、禁忌のないこと、副作用のない事等が挙げられ臨床的価値が認められ、本法によつて既に高安、石山、大越、斎

藤、荒井等の発表がある。

著者等も本法を約 50 例の患者に施行し諸方面から検討したが、上記に挙げられた特徴の他に一種の O_2 療法であると考えに至つた。斎藤教授は数年来 O_2 血を創案し、実験的並に臨床的にその効果を確立し、更に O_2 腸内輸入法、 O_2 吸入法、組織中に O_2 を入れる方法、酸素テント等に関して酸素療法として発表